

議論としてのフィクション

クリティカルシンキングは、自分や他者の理由付きの主張、すなわち議論を批判的に吟味するための手法である。そうした吟味の対象となるのは、通常は事実関係についての主張や価値判断などである。事実として主張されていることが実は虚偽ではないかということが吟味されるわけである。では、最初から虚構であることを明示している小説やマンガ、映画などはクリティカルシンキングの対象とならないのだろうか。本稿ではグライスの推意の理論や協調原理を援用しつつ、フィクションをクリティカルシンキングの対象として位置づけ直すことを目指す。

1 クリティカルシンキングとは

クリティカルシンキングは日本語では「批判的思考」と訳され、他の主張をうのみにせず考える技術を指す。アメリカでは論理学入門の授業として定番化している。アプローチとしては哲学系のアプロ

チと心理学系のアプローチがあり、哲学系のアプローチでは「理由付きの主張」、すなわち議論が検討の対象となる（以下ではもっぱら哲学系のアプローチについて述べるので、特に「哲学系」と断らず「クリティカルシンキング」と呼ぶ）。クリティカルシンキングでは理由として挙げられた情報は正しいか、その理由からその主張は本当に導き出せるのか、などをチェックする。理由として挙げられたことが偽であるなら、その時点でその議論は議論としては失敗しているという評価になる。

クリティカルシンキングの考え方を日本語の文章にあてはめた場合に気がつくのは、理由付きの主張をしているはずなのに、肝心の主張が明示されていない場合が多いことである。これは、なにかを主張しているはずの新聞の社説などにおいてすら常態化している。ただ、読む側が勝手に補って読む習慣がついているので、実は主張が書かれていないことに気づかない事が多い。クリティカルシンキングのテクニックとして理由と主張を抜き出して論証図を作るという方法がある

伊勢田 哲治
いせだ てつじ
(京都大学)

が、これをもってはじめて主張の本体が書かれていないことに気づくこともしばしばである。こうした文章作法が広がっている背景としては、はっきり言わないことで責任のがれをしているという見方もできる（たとえば、「私はワクチン接種について心配すべきことを述べただけであつて、別にワクチン接種を控えると主張したわけではない！」など）。

そうした文章をクリティカルシンキングのまな板に乗せる上で、グライスの推意の理論をはじめとした会話の理論は強力なツールとなる。本稿は、その同じ会話の理論を使いながら、フェイクニュースやフィクション作品を議論として読み取り、クリティカルシンキングの対象としようという試みである。しかしその話に進む前に、フェイクニュースやフィクション作品という概念や、それらを包括するフィクションという概念をどう使うつもりかということについて次節で確認する。

2 フェイクニュースとフィクション作品

2-1 フィクション

まず、本稿で使う概念の説明を行う。フィクションという概念は、作り話全般を指す言葉として使う。フィクションとはなにかという問題はフィクションの哲学の大問題ではあるが、そこで確認されているのは、フィクションという概念自体が多義的であり、また、多義的な概念のそれぞれの定義もよつつかいな問題を含んでいるということである

（清塚 2017, Kroon 2019）。本稿の目的としては、批判的吟味の対象となるようなコミュニケーションの一環としてのフィクションに興味があり、その興味にそつた定義を行っていく。

作り話は内容が虚偽であるような話と似た概念であるが区別される。内容が虚偽であるような話の中には、記憶違い、言い間違いなど、過失によつて虚偽となつた話も含まれるが、これは作り話とは呼ばないだろう。作り話は、現実と対応しないことを作つた本人が理解した上で作られた話である。⁽¹⁾ここでいう「理解」は、実際に現実と対応しないということを意味するわけではない。というのも、たまたま現実と対応してしまつたとしても作り話が作り話でなくなるわけではないと考えられるからである。「アメリカの大統領は爬虫類人間に操られている」と何の根拠なく主張している人がいたとして、それが（まったくの偶然から）真実であつたとしても、もとの主張が作り話でなくなるわけではない。以上を踏まえて、フィクションとは「結果的に内容が現実と対応するにせよしないにせよ、作つた本人がその内容が現実と対応しないことを理解した上で作られた話」とする。⁽²⁾

2-2 フェイクニュース

この意味でのフィクションの中にはさまざまな意図で作られた多様な「作り話」が含まれるが、本稿で主に検討の対象にするのがフェイクニュースとフィクション作品である。フェイクニュースという言葉は近年よく耳にするが、その定義は人によってさまざまに分かれるようである。笹原（2021）は「ニュース報道の体裁で拡散される、虚

偽の、しばしば扇情的な内容の情報」というコリンズ辞書の定義を引用した上で、拡散者の動機や、デジタルテクノロジーとの相互作用といった要素もフェイクニュースを定義する上で重要であると考える（ただし、代替の定義を提示してはいない）。コリンズ辞書のように、広義には単純な誤解に基づく誤報も含め、報道内容が虚偽であるような報道をすべてフェイクニュースと呼ぶこともできるだろうが、これはむしろ従来からある「誤報」という呼びの方が適当だろう。近年問題になっているフェイクニュースは、どちらかといえば、しばしば政治的な意図に基づいて、現実と対応していないことを発信者が理解しながら、現実に行き起きていることであると誤解させるような形で発せられる情報であろう。二〇一六年のアメリカ大統領選挙時に「クリントン候補は児童買春に関わっていることで捜査を受けている」といったクリントン候補を中傷するような虚偽のニュースや、逆にトランプ候補にとって都合のよい虚偽のニュースなどがSNSで多数発信され、これが「フェイクニュース」という言葉が拡散するきっかけとなった（笹原 2021, pp.24-29; ASIOS 2021, p.12）。これらはまさにこの意味でのフェイクニュースと言っていだろうか。二〇二〇年のアメリカ大統領選挙の不正についてトランプ陣営が発した情報や、コロナウイルスワクチンについて反ワクチン派が発した健康被害情報などの中にもこの意味でのフェイクニュースが多く含まれてきた。

他方、フェイクニュースということの理解のしかた次第では、「現実と対応していないことを発信者が理解している」という条件は狭すぎるようにも思われるかもしれない。たとえば二〇二〇年のアメ

リカ大統領選挙の不正についての情報を拡散している人の中には、明らかに不正があったということを信じて情報を拡散している人も多いように見える。彼らが拡散しているのはフェイクニュースではないのだろうか。一つのパターンとして、発信者は根拠がないと分かっているフェイクニュースを拡散していたが、二次的な拡散者は根拠があるものと信じて拡散しているといった場合もあるだろう。たとえば、近年のフェイクニュースの拡散の方法としてよく見られるのが、まったく関係のない画像や加工された画像が「証拠」として添付されたSNSの投稿である（「ワクチンを接種してこんなひどいことになった」と言って拡散された画像がまったく別の病気の画像だったという場合など）。この場合、二次的拡散者はともかくとして、画像を流用したり加工したりした本人は明らかに相手を騙そうとしているわけで、誤解しているということは非常に考えにくい。こうしたものは内容的にはフェイクニュースだと分類して差し支えないだろう。他方、最初の発信者も含めて拡散者すべてが内容の正しさを信じている場合は、そう信じた理由にもよるが、勘違いなどによる誤報と同じカテゴリーに分類した方が適当かもしれない。

以上を踏まえて誤報に関する用語法を整理する。内容が現実と対応していないような情報発信全般を「誤報」とよび、誤解や事実誤認など、誤報を流すことを意図していなかったものを「過失による誤報」、発信者が現実と対応していないことを理解しつつ作り話を情報共有したものを「フェイクニュース」と呼ぶこととする。⁽³⁾

2.3 フィクション作品

フィクションのもう一つのカテゴリーとして小説、マンガ、劇映画などの「フィクション作品」がある。フィクション作品もまた、作った本人（劇映画などの集団的作品の場合には作った集団）がそこで語られている内容が現実と対応していないことを理解した上で読者・視聴者（以下「受け手」と総称）に対して送り出されているという意味で、上記のフィクションの条件を満たしている。フィクション作品の中には、時代小説のように部分的に現実と対応しているものもあるが、その場合は話の大筋が現実と対応していないなら十分フィクション作品とみなされるだろう。他方、ノンフィクション作品でも登場人物の名前や個人を特定する情報を意図的に変えるなど、虚偽の内容を含むことがあるが、こちらは大筋が現実と対応しているならばそうした部分的な虚偽によってノンフィクション作品でなくなったりはしないだろう。また、フィクションのつもりで書いたなら偶然にも実際にその通りのおこったということもありうるだろうが、そうした偶然によってフィクションがフィクションでなくなるわけではないだろう。したがって、大筋として現実と対応しないことを理解した上で受け手に対して送り出されたものであるなら、偶然的に現実と対応しているかどうかにかかわらず、フィクション作品と呼んで差し支えないように思われる。

では、フェイクニュースとフィクション作品はどのような関係にあるだろうか。一見したところ、フェイクニュースとフィクション作品は共通点が少ないように思われる。フェイクニュースは断片的な情報

であることが多いし、作品として鑑賞できるような内容でもないことが多い。しかし、これらは本質的な差とは言い難いだろう。フェイクニュースの中には壮大な陰謀論を背景としたものもある。アメリカ大統領選挙の不正に関するフェイクニュースがまさにこれにあたるし、Qアノンが信じているとされる陰謀の内容の説明はまるでSFかスパイ小説の設定のように読むことができる（木澤2020）。こうしてみると、フェイクニュースが断片的だというのは必ずしも正しくはない。また、作品としての鑑賞に耐えるかということでは、フィクション作品の中でも作品の質はいろいろであり、作品としての鑑賞に耐えないフィクション作品は多くはないだろう。ある小説が鑑賞に耐えない質のものであっても、悪いフィクション作品になるだけであって、そもそもフィクション作品でないと判定されるわけではない。

フィクション作品かフェイクニュースかは「作者」の意図で決まるという考え方もありうる。つまり、作者が鑑賞を意図して発信したのであればフィクション作品であるし、本当のニュースだと誤認させようと思図して発信したのであればフェイクニュースである、という基準である。ただ、この基準だと、SNSで大統領選挙の不正について無根拠な情報を流していた本人を問い詰めたときに「私は小説として書いただけで、信じるほうが悪い」と聞き直りさえすればフェイクニュースではなかったことになってしまう。

他方、フィクション作品なのかフェイクニュースなのかは受け手の受け取り方で決まる、と考えることも都合が生じる。エピソード的な事例としてよく知られているのは、ラジオドラマ「宇宙戦争」（一九三八

年)が現実だと信じた人々がパニックを起こしたという事例である。実際に大きなパニックがおきたかどうかについては近年の研究では否定的である(Schwartz 2015)。ただ、少数ながらもラジオドラマ内の火星人による侵略が実際に起きていることだと信じた人たちがパニック行動をとった人たちがいたこと自体は事実のようである。この場合、パニックを起こしたリスナーが「私が信じたのだからこの番組はフェイクニュースだ」と主張したとしても、それをそのまま受け入れるわけにはいかないだろう。この作品は「マーキュリー・シアター・オン・ジ・エア」というラジオドラマの枠の中で放送されており、注意して聞いていればドラマだと理解できたはずだからである。

ラジオドラマ「宇宙戦争」のような例を念頭におくならば、フェイクニュースとフィクション作品を分けるポイントは、むしろ、情報の提示のされ方の方にあると考えるべきではないだろうか。フィクション作品はフィクション作品であることがわかるフォーマット(小説としての装丁、劇映画としての劇場での公開など)で受け手にわたされ、そのフォーマットゆえに、受け手もそれが鑑賞のために受け渡された「作品」であることを理解する。告白体の小説やドキュメンタリー風の劇映画がそれでも小説や劇映画として問題なく認識されるのはまさにこのフォーマットゆえである。他方、フェイクニュースは、まさにそうした「作品」としてのフォーマットを持たずに拡散されるため、真実だと信じる人が出てくる。フェイクニュースの多くは新聞やテレビなどの伝統的なニュースメディアで発信されるわけではなく、SNSやオンラインメディアで拡散されることがほとんどだが、こうした

新しいメディアが伝統的なメディアでカバーされにくい情報の貴重な媒体となりうることもわれわれは身をもって感じており、その体験がフェイクニュースをニュース的な情報共有の一種として扱う文脈を形成している。このように考えることで、作者や受け手の意図や理解とある程度独立に、ある情報発信がフェイクニュースかフィクション作品かを文脈的手がかりから客観的に判定することが可能となる。⁽⁴⁾

以上の考察を踏まえて、フェイクニュースとフィクション作品を区別するならば、フェイクニュースは「文脈的にニュース的な情報共有と受け取られる形で発信されるフィクション」、フィクション作品は「文脈的に鑑賞のためのフィクションと受け取られる形で発信されるフィクション」と整理することができるだろう。

3 フィクションとクリティカルシンキング

以上のようなフィクションについてクリティカルシンキングをするという場合、われわれは何をすればいいのだろうか。この際に2つの視点を区別したい。それは「主張としてのフィクション」と「議論としてのフィクション」の区別である。

3-1 主張としてのフィクション

まず、フィクション内で語られていることそのものが現実世界についての一つの主張として捉えられる場合、その主張に根拠があるか、与えられた根拠から本当にその主張が導けるかを考察するというのが

クリティカルシンキングの一つの役目となるだろう。鑑賞のために送り出されているフィクション作品については、そもそも現実世界についてこの意味での主張はしていないと考えるべきだろう。『宇宙戦争』のラジオドラマの中で「火星人の宇宙船がニュージャービーに着陸して戦闘が始まった」ということがいくらニュース風に語られていようとも、それがドラマというフォーマットの中で行われる語りである以上、現実世界で実際に火星人がやってきて戦闘が始まった、という主張とはならない。したがって、クリティカルシンキングの仕事は、主張の根拠や推論を吟味することではなく、まずフォーマットなどの文脈的情報から、そもそも主張が行われていないことを読み取り、根拠や推論の吟味のプロセスを発動させない、という方にあることになるだろう。

他方、フェイクニュースはまさにこの意味での主張を行っていると考えられる。もちろんフェイクニュースのここでの定義からいって、発信者本人は発信している内容が現実世界と対応していないことを理解しているわけだが、だからといって主張をしていないことにはならない。この場合、まさに主張の根拠として提示されたものを吟味し、その根拠からその主張が導けるかどうかを吟味することがクリティカルシンキングの役割となる。実際、フェイクニュースに対して行われる「ファクトチェック」のかなりの部分がこの意味でのクリティカルシンキングに該当する。ただ、現実のフェイクニュースはそもそも検証可能なソースが提示されていないことが多い。この場合、クリティカルシンキングという観点からはそもそも批判的吟味の前提すら整っ

ていないということでも門前払いでもよいわけだが、フェイクニュースが疑われ、しかも大きな影響があるという状況においてはそれ以上の対処が必要となる場合がある。実際問題としてはファクトチェッカー自身が証拠を調べて主張内容の正しさを検証することになる。

3-2 議論としてのフィクション

フェイクニュースを批判的に検討する場合、ただ単に内容が間違いだということを示して検討を終わりとするだけでは不十分なことも多いように思われる。たとえばフェイクニュースという言葉が広まるきっかけになった二〇一六年のアメリカ大統領選挙では、ヒラリー・クリントン候補が児童買春に関与しているとして捜査の対象になっていたというフェイクニュースが流された。ここで、児童買春があったかなかったか、捜査が行われているか否かという事実関係のみに興味を持ち、そうした証拠がないということを指摘してクリティカルシンキングの仕事は終わりだと考えるのも一つの考え方ではある。しかし、この時期にこうした情報を流す側は、当然ながらクリントン氏に投票するべきでないという結論に誘導するためにその情報を流しているわけである。つまり、ここには、「クリントン候補が児童買春に関与している」という主張と別に、この主張を前提として「クリントン候補に投票するべきではない」という結論を導く暗黙の議論も存在していることになる。これが、本稿でいうところの「議論としてのフィクション」の一つの形である。つまり、フィクションは暗黙の結論を伴うことでそれ自体として一つの議論たりうるのである。

ここで例としたフェイクニュースについては、この暗黙の議論の前提（フェイクニュースの内容そのもの）が現実と対応しておらず、そのために議論として成立していない（その情報からは「クリントン候補に投票するべきではない」という結論が導けない）ことを示すのは比較的容易である。しかし、フェイクニュースがどういう結論に誘導しようとしているのかがわかりにくい場合もあり、批判的な吟味の役割はそういう場合に大きくなるだろう。

さらに、フェイクニュースとされるものの中には必ずしも「クリントン候補が児童買春に関与している」と断定する形のものばかりではなく、「関与している可能性がある」「関与している」といふ噂がある」などのように主張をぼかすものもある。可能性だけならそもそもありとあらゆることに可能性があるので、「可能性がある」という言い方ならたいていの主張が真となり、上で定義した意味でのフェイクニュースですらないかもしれない。また、「噂がある」ということについては、そのフェイクニュースの存在自体によって真であると言ってもいいかもしれない。では、この種のフェイクニュースまがいのものについて、「可能性はどんなことにもあるから可能性がある」というのは嘘ではない」「噂があるのは事実だから嘘ではない」と結論すれば批判的吟味は終わったのか、といえばそうではないだろう。ただ「可能性がある」とか「噂がある」というだけでは、当然ながらクリントン候補に投票しない理由にはならない。議論というものの特性として、前提を弱めれば前提そのものの妥当性を示すのは容易になるが、前提が結論を支持する力が弱くなる。フェイクニュースやそれに

類する主張を暗黙の議論として読み取ることで、こうした批判的検討も可能になるのである。

さて、ここで生じる疑問は、前提がフィクションであるような議論はすべて不成立なのだろうかということである。一見したところ、現実と対応していない前提から現実世界について何の結論も導けないというのはもつともらしく思われる。しかし、フィクションのもう一つのカテゴリー、フィクション作品まで視野を広げると、話は変わってくるように思われる。すなわち、フィクション作品は、単独の主張としては意味をなさなくとも、その作品を前提とした議論という形をとることはしばしばあるように思われるからである。

例えばわれわれは「〇〇の大切さを訴える小説（映画、マンガ）」といった表現はしばしば目にする。この表現を字義通りにとるなら、そのフィクション作品が「理由」となって、「〇〇は大切である」ということが結論となるような「議論」が行われていることになる。もう少し具体的な例をとるなら、「反戦映画」と呼ばれるタイプの映画がある。そうした映画は、一般に、戦争に反対するというメッセージを伝えるだけではなく、「戦争はこれこれこういう理由で行うべきではない」というタイプの理由付きの主張、すなわち議論を行っているように見える。しかし、もし前提が現実と対応していない議論がすべて不成立であるのなら、どうして反戦映画などというものが成り立ち得るのだろうか。

以下で行うのは、こうした議論がどうやって成立しているのか、そ

してその議論をどのように批判的吟味の俎上に乗せればよいのかについての素描的な検討である。⁽⁵⁾

4 フィクション作品の暗黙の主張

4-1 フィクション作品の主張を読み取る手がかり

われわれはさまざまな手掛かりを使ってフィクション作品の中に現実世界についての主張を読み取る。いくつか例を挙げる。

- (1) ある出来事の肯定的側面（一般的に肯定的とされるような側面）が中心に描かれる（その出来事の結果人々が幸せになるなど）
- (2) ある出来事の否定的側面（一般的に否定的とされるような側面）が中心に描かれる（その出来事の結果人々が不幸になるなど）
- (3) ある主張をしている人物が肯定的に描かれる（一般に美德とされる性格を持っている、幸せになるなど）
- (4) ある主張をしている人物が否定的に描かれる（一般に悪徳とされる性格を持っている、不幸になるなど）

こうした読み取り方は、反戦映画やその反対の戦争賛美映画というカテゴリーを理解する上でも利用されているように思われる。「戦争の悲惨さ」や「戦争を推進する人々の愚かさ」などの戦争の否定的側

面が描かれれば反戦映画と解釈されるだろうし、「戦闘行為のかっこよさ」や「さまざまな徳を身に着けた存在としての軍人」など戦争の肯定的側面が描かれていれば「戦争賛美映画」とみなされるだろう。これは言い換えれば反戦映画は「戦争は悪いものである」という現実世界についての暗黙の結論を持つ議論、戦争賛美映画はその逆の暗黙の結論を持つ議論を構成していることになる。

より具体的に、反戦映画がいかんにして反戦映画となっているかを映画の中で取られている戦略という観点から分析した論考として、ロサーメル「反戦戦争映画」(Rothenel 2010)がある。上記のような一般論が成り立っているかどうかをロサーメルの論考と比較して考えてみよう。ロサーメルは反戦的なメッセージを持つとされる代表的な戦争映画として『西部戦線異状なし』(ルイス・マイルストン監督、一九三〇年)、『大いなる幻影』(ジャン・ルノワール監督、一九三七年)、『戦場に架ける橋』(デヴィッド・リーヴン監督、一九五七年)、『突撃』(スタンリー・キューブリック監督、一九五七年)、『ジョニーは戦場へ行った』(ダルトン・トランボ監督、一九七一年)、『フルメタル・ジャケット』(スタンリー・キューブリック監督、一九八七年)『シン・レッド・ライン』(テレンス・マリック監督、一九九八年)などを分析し、そこでメッセージを伝えるために使われている戦略を13個数え上げる(Rothenel 2010, pp.80-100。原文の説明を若干簡略化した項目もある)

戦略1 戦争を恐怖、パニック、喪失などに耐える兵士が経験した

ものとして、とりわけ死への直面として描く

戦略2 英雄的な勇敢さと意味のない犠牲の間の薄い区別に穴をあける

戦略3 ランダムな犠牲が戦争の本質である様を描く

戦略4 自分と対応するような敵兵との対峙を通して戦争の野蛮な論理や戦略が正体をあらわす様を描く

戦略5 上意下達によって課される野蛮な論理に兵士たちが反対しながらも、結局それに従い、その論理の道具となる様を描く

戦略6 兵士が自分が巻き込まれてる戦争の目的を見失う、あるいは最初から理解できない様を描く

戦略7 ある国の文化が、若者たちが戦争や好戦的な徳に熱狂するよう仕向ける様を描く

戦略8 兵士が訓練による条件付けで、あるいは恐怖と喪失によってモラルを喪失していく様を描く

戦略9 兵士たちが平和に暮らした世界から疎外されていく様を描く

戦略10 恐怖が人を無力化することを示す

戦略11 観客が特定の個人に感情を傾注すると、それらの個人の描かれ方によって英雄が悪者に暴力を振るうことに肯定的な感情的反応が生じてしまうので、それを避ける

戦略12 個人、国家、組織などに非難や憎しみが固定されるのを避ける（そうすると戦争そのものの悪から注意がそれてしまう）

戦略13 特定の戦争の歴史的文脈から独立に戦争の意味を問い、人

間存在について考える手がかりとして提示する

このリストは実際の映画の中から抜き出されたという意味で非常に示唆的である。ここで挙げられる戦略のうち戦略10までは、戦争と結びついておきる、われわれが決して望ましいと思わないような出来事をリストアップしたものとなっている。また、戦略11は、戦争が「悪者を懲らしめる」といった肯定的な側面を持つというメッセージを避ける意味合いを持つと考えられる。これらの戦略は、上記の(1)や(2)を具体化したものとして容易に解釈可能である。

興味深いのは戦略12と戦略13で、これらは劇中で描かれる否定的な側面を戦争以外のもの（特定の個人、国家、組織、特定の戦争）と結びつけてしまうようなミスリーディングな手がかりを与えず、普遍的な戦争そのものへ反対するメッセージにするための戦略である。実際、こうした観点からロサーメルは代表的な戦争映画とされる『ジョニーは戦場へ行った』は反戦映画として失敗していると論じる (Rohrmel 2010, p.10)。この映画の主人公は戦争の負傷によって外部とコミュニケーションできない状態になるが、そうした負傷は戦争でなくても起きうるものだから戦争というものの悪をつたえる構造になっていないというのである。

反戦映画が「戦争は悪いものである」という結論へ導く暗黙の議論であるにとらえたとき、これらの戦略の意味合いもよく理解できる。暗黙の議論であるがゆえに、結論は言語化されていない。その言語化されていない結論へ正しく導くためには、別の解釈の可能性をできる

限り排除する必要がある。そのための工夫が戦略12や13だと考えることができる。

4-2 グライスの協調原理とフィクション

ロサメールはさまざまな戦略が意識的にとられたものだと考え、そこから反戦のメッセージを導き出しているが、はたしてこうした戦略やメッセージは本当に意図的なものだろうか、それとも戦略もメッセージもないところに勝手に受け手が戦略やメッセージを読み取っているだけなのだろうか。もし後者だとすれば、フィクション作品を議論として検討の対象にするのは筋違いだろう。しかし、あるフィクション作品の持つ客観的な特徴をもとに、「この作品はかくかくという議論を行っている」といえる場面もあるように思われる。グライスの協調原理を始めとする会話の理論は、こうした議論としての側面を客観的に取り出す際に利用できるだろう。どの会話の理論からも似たような分析は可能だと思われるが、グライスの4つの格率はと

りわけ実用性が高いのでここではグライス理論に即して話をすすめる(Grice 1975)。

グライスが会話を分析する基礎とするのは、協調原理 (principle of cooperation)、すなわち「会話者はお互いに会話の目的として受け入れられているものが要求することを提供せよ」という原理である。日常の会話においてわれわれはすべてを明示的に述べるわけではなく、言わずに済むことは直接発話せずに発話から導かれる含意として伝える。これを推意 (implicature) と呼ぶ。この推意を導き出す際に使われるのが、相手は協調原理に従って発話しているはずだ、という前提である。

協調原理をより具体的なものとするのが4つの格率である。4つの格率とは、量の格率 (必要十分な量の情報を与える)、質の格率 (嘘を言わない)、関連性の格率 (関係ないことを言わない)、様態の格率 (不必要に曖昧な言い方や回りくどい言い方をしない) の4つである。たとえば「これから飲みに行こうよ」と誘われたとき、「まだ仕事がある」

という答えが「まだ仕事があるから飲みにはいけない」という意味になるのは、飲みに行く誘いという文脈においてまだ仕事があるということが関連性を持つならば、まだ仕事があるということが飲みに行くことの妨げになる場合だからである。これは関連性の格率に基づき判断であり、「それゆえに飲みに行けない」という推意がそこから導かれている。この例のように、協調原理はわれわれの日常の中にあまりに染み込んでおり、「まだ仕事がある」と答えた本人ですら「飲みに行けない」と自分が実際に発話していないことに気づいていない可能性があるだろう。

こうした推意による情報伝達と、上に見たような反戦映画における反戦のメッセージの伝え方にはある種の共通点があるように思われる。それならば、「まだ仕事がある」という発話から関連性の格率を使って筋道立てて「飲みに行けない」という結論を導けるように、4つの格率を使って反戦のメッセージや逆の戦争賛美のメッセージを推意として導き出すことは可能かもしれない。

ただ、そうした応用をする前にいくつか解決すべき問題もある。まず、そもそもフィクションを語ることは会話なのだろうか。会話は双方向的なプロセスであるが、フィクションは（フェイクニュースであるフィクション作品であれ）一方向的に送り出されるだけである。発信する際には誰が受け手になるかはつきりとは分かっていない。そうした状況は会話の規則を適用する上で障害にはならないだろうか。これについては、相手の反応や理解のされかたを予想しつつ行われる発話は別に双方向的でなくても会話としての性格を持つし、同じような

形で推意を持ちうる、と答えることができるだろう。

第二に、協調原理の中で言及されているように、4つの格率はあくまで「会話の目的」が共有されていることを前提としているが、フィクションの送り手と受け手の間で果たして「会話の目的」は共有されているだろうかという問題がある。フェイクニュースの場合は、発信者は情報の内容が現実と対応していないことを知りながら受け手にはそれが実際のことだと思わせようとしているわけであり、目的は共有されていない。しかし、ここでも会話の目的は発信者・受信者の実際の意図で完全に決まるわけではなく、情報発信のフォーマットによつて客観的に決まる部分もあると考えられる。政治的に重要な事実を伝えるフォーマットで伝達が行われている以上、発信者の本来の意図と関係なく、そこで期待される会話の目的は政治的に重要な事実を伝えるという目的であり、それに反する発話は非難の対象となりうる。フィクション作品の場合、「会話の目的」がフォーマットによってある程度客観的に決まるとするならば、そこから判断される主な「会話の目的」は作品としての鑑賞ということになるだろう。ただ、反戦映画のようなカテゴリーが問題なく受け入れられているということからは、フィクション作品の伝達においては作品としての鑑賞を超えた目的を持つこともなくはないということもまた受け入れられていると言っているだろう。この場合、ある意味で受け手はフィクション作品が達成しようとしている「会話の目的」を作品の内容から逆に推測する、「目的の逆算」とでもいうべきことを行っているのではないかと思われる。

第三に、そもそもフィクションは会話の格率の一つである質の格率、すなわち嘘を言わないという格率に最初から違反しているので、協調原理の適用対象となりえないのではないか、という疑いもあるかもしれない。これについては、質の格率を「会話の目的の範囲内で正確な情報を提供する」というように解釈しなおすことで対応は可能かもしれない。そうだとすれば、フィクション作品のように情報伝達ではなく作品としての鑑賞が目的であるような「会話」においては内容が現実と対応していないことは特に問題ないということになるだろう。

「会話」というもののこうした拡大解釈が適切なものかどうかはさらに検討する必要があるテーマではあるが、ここでは以上のような考察で予備的な考察としては十分なものとして、協調原理を適用すると議論としてのフィクションがどのように捉えられるかということを見たい。

4.3 フィクション内の暗黙の議論の導出

以上のような観点からフィクションの中の議論を見ると、どのように捉えることができるだろうか。フィクション作品とフェイクニュースに分けてそれぞれ考える。

フィクション作品においては叙述には大きな自由度がある。その自由度は主に鑑賞の対象としての作品の質を高めるために使われると考えられるが、さまざまな理由からそれ以外の目的があると解釈される場合がある。反戦映画や戦争賛美映画の場合には、そもそも戦争とい

うセンチティブな話題を選択した時点で単なる作品としての鑑賞以上のメッセージがあるのではないかといわば身構えて鑑賞が行われることになるだろう。

そうした関心でフィクション作品を見るとき、作品のさまざまな特徴が関連性の格率を利用して解釈されることになるだろう。たとえば、ある出来事の否定的な側面が描かれるという描き方が受け手にとって関連性を持つのだとすれば、その出来事についての否定的な意見を伝えようとしているという関連性が思いつかれるだろう。特に、鑑賞上の効果にあまりつながらないような箇所については、そうした主張の関連性の可能性が強く、様態の格率からいえば、伝えたいことがあるならそれはできるだけわかりやすい形で描かれているはずである。他の解釈の可能性が見当たらないのであれば、この様態の格率はフィクションのメッセージについて素直な解釈を行う根拠になる。なわち、ロサーメルの十三の戦略に該当するような描き方によって、戦争にまつわるさまざまな負の側面を描いているフィクション作品は、まさにその側面をとりあげて作品の中に取り上げることによって、戦争を否定するメッセージを伝える意図があるはずだ、と判断されるのである。

こうした解釈を行う場合、描かれている出来事が厳密には現実の出来事ではないということはあまり障害にならない。たとえばロサーメルの第一の戦略、「戦争を恐怖、パニック、喪失などに耐える兵士が経験したものととして、とりわけ死への直面として描く」という点を例にとる。たしかに作品内の兵士は架空の人物かもしれないが、戦争に

おいて恐怖やパニックや喪失を多くの兵士が経験してきたことは事実である。描かれていることはそうした普遍的な出来事の、現実ではないにせよありえた一例である。そうした普遍的な経験への想像を働かせるための手がかりとして、フィクション内の出来事が使われている。つまり、議論としてのフィクション作品において、たとえば「戦争は悪である」という結論を導くために用いられるのは、「架空の人物が兵士として戦争で恐怖を体験した」という前提ではなく、「その架空の出来事から想像できるように、多くの現実の兵士が戦争で恐怖を体験した」という前提なのである。

このように会話の格率を問にはさんで議論を特定することで、ただ受け手が勝手に意図を読み取っているのではなく、ある程度客観的に特定可能なものとしてフィクション作品に暗黙に含まれる議論を特定できる（具体的にどのように特定するかということについては伊勢田(2021)を参照）。

議論としてのフィクション作品については以上として、この考察はフェイクニュースにも適用可能だろうか。フィクション作品の場合に前提が偽であることが議論が成立する障害にならないのであれば、フェイクニュースも暗黙の議論として成立している可能性があるのではないだろうか。

何度か事例として使った、「クリントン候補は児童買春に関与しており、捜査をうけている」というフェイクニュースの例を考えてみよう。反戦映画との比較でいえば、もしこの情報そのものが現実と対応していないくとも、この情報から想像を働かせることができるような普

遍的な事実や関連する事実があつて、それが「クリントン候補に投票するべきではない」という結論を導き出すための前提として機能するのであれば、そうした暗黙の議論が成り立つ可能性はある。たとえば、民主党の政治家は一般に児童買春に関わりがちであるとか、そうでなくともその他の不道徳な非合法活動を行いがちだったことが普遍的な事実として知られているのであれば、それを思い起こさせることで議論としてフェイクニュースが機能するということはありうる。

しかし、理屈の上ではそういうことがありうるが、実際にその形で議論が成立するのは考えにくい。というのも、フィクション作品の場合とちがって、作品として鑑賞するという視点が不要ないフェイクニュースにおいては、もしそうした普遍的な事実があるのであれば、直接それを指摘すればすむであろう。それをしないのは、フィクションの内容から連想すべき普遍的な事実の方がとくに存在しないからだと、ということが逆に受け手に対して伝わってしまうだろう。不必要に回りくどい表現をしないという様態の格率がここで適用される。

以上のように、会話の格率を援用しながら議論としてのフィクションの構造を特定していくことで、フェイクニュースとフィクション作品を対比しながらも同じ枠組みで扱うことが可能となる。ただ単にフェイクニュースの内容が現実と対応していないというだけでなく、メッセージ性のあるフィクション作品と比較してもフェイクニュースは議論として問題があるということをより深く分析できる。クリティカルシンキングにはこうした分析を行う力もある。

5 まとめ

本稿では、クリティカルシンキングの視点から、グライスの推意の理論を援用しつつ、フェイクニュースやフィクション作品といったフィクションが現実世界についてなんらかの「理由付きの主張」、すなわち議論をしていると考えることができないかを考察した。そうした議論の読み取りは文脈に強く左右されるが、読み取りは不可能ではなく、ある程度の客観性をもって判定が可能である。このようなフィクションの推意についての考察は、ある種のフェイクニュースの批判的な検討にも援用が可能である。本稿ではその可能性の一端を示すことができたのではないかと考える。

文献

- Grice, P. (1975) "Logic and conversation." Cole, P. and Morgan, J. eds. *Syntax and Semantics, vol. 3: Speech Acts*. Academic Press. pp. 41–58.
- Kroon, F. (2019) "Fiction." *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <https://plato.stanford.edu/entries/fiction/> (最終閲覧日 2021年2月18日)
- Rohrmel, D. (2010) "Anti-war war films." in Andrew Fitz-Gibbon ed. *Positive Peace: Reflections on Peace Education, Nonviolence, and Social Change*, Brill, pp. 75–109.
- Schwartz, A.B. (2015) *Broadcast Hysteria: Orson Welles's War of the Worlds and the Art of Fake News*. Hill and Wang.
- ASIOS (2021) 『陰謀論はなぜこんなに真実か 増補版』文芸社
- 伊勢田哲治 (2005) 『哲学思考トレーニング』ちくま書房

伊勢田哲治 (2021) 「フィクションはいかにして理由付きの主張を行うか」

Nagoya Journal of Philosophy vol.15, pp.14-32.

木澤佐登志 (2021) 「Qアノン、代替現実、ゲーミフィケーション」『現代思想』49(6), pp. 22-33.

清塚邦彦 (2017) 『フィクションの哲学 改訂版』勁草書房

笹原和俊 (2021) 『フェイクニュースを科学する——拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ』化学同人

注

(1) 本稿では、真理の対応説や「現実とは何か」といった哲学的懐疑論にまつわる諸問題には踏み込まない。哲学的議論の文脈においてはこれらの問題を考えるのが重要であろうが、これら哲学的懐疑をかつこにくった上で議論すべき現実的に重要な問題も多くあり、それはまた別の文脈をなす。こうした問題領域ごとに疑うべき論点が異なるという考え方については伊勢田2005を参照のこと。

(2) 「現実と対応しない」というまわりくどい表現をして、「虚偽である」という表現を避けるのは、フィクション上の主張の真理値については面倒な問題があるためである。たとえば「シャーロック・ホームズはベーカー街に住んでいる」という文は、架空の人物についての文である以上現実とは対応していないが、フィクション内の事実関係の記述としては正しいので、ある意味において真と言いうる余地がある。この問題を避けるために、本稿ではフィクション上の主張に関しては真偽の判定を避ける。

(3) 笹原はフェイクニュースの定義においてSNSなどのデジタルテクノロジー上のネットワークの問題として捉えることが重要だと述べているが(笹原2021, p.17)、本稿では定義のレベルではこうした言及を行わない。確かに現代に特有な社会現象としてのフェイクニュースを社会的に分析する上ではSNSとの関係は無視できないだろう。しかし、その現代においても伝統的メディアが内容的にSNSのフェイクニュースと同等のものを拡散することはないわけではないし、話をSNSに限定してしまうと分析のスコープがあ

まりにも小さくなってしまふ。こうした理由から、本稿では、少なくとも定義のレベルでは、フェイクニュースはSNSで発信・拡散されたものには限らないと考えることとする。

(4) このような捉え方をしたときに少し困るのが、ニュースメディアのような体裁を取りながらも極端にばかばかしい記事を掲載することでフェイクニュースとなることを避けているパロディ的な情報発信の扱いである(国内では「虚構新聞」というサイト [<https://kyoko-np.net/>] がよく知られている)。こうしたパロディニュースサイトは単純なフォーマットだけでいえばフェイクニュースの条件を満たしてしまふが、それではパロディというものが不可能になってしまいかねない。一つの考え方としては、発信されている情報の内容そのものが文脈を構成する一部であると考え、あまりにばかばかしい内容の情報は原理的にフェイクニュースにならないようにフェイクニュースをとらえるという定義の方法がありうる。しかし、実際に流通しているフェイクニュースの中には、「コロナウイルスワクチンにはマイクロチップが組み込まれている」といったものもあり、「内容がばかばかしい」からといってフェイクニュースにならないとも言切れない。フェイクニュースとパロディをうまく切り分けるような定義をするにはもう少し繊細な工夫が必要だと思われるがそれは今後の課題としたい。

(5) 以下で論じていることの多くは、伊勢田(2021)においてより詳しく検討している。

Summaries

Fictions as Arguments

Tetsuji ISEDA

Critical thinking is a skill to critically examine arguments, i.e. claims with reasons. The typical object of critical thinking is factual claims or value judgements; fictional works like novels, movies and mangas are not within usual scope of such examination. This is understandable because it does not make much sense to ask the validity of factual statements in fictional works. However, there are other types of fictions that need to be critically examined; namely, so-called fake news. This paper tries to offer an integrated account of critical examination of fictions utilizing Grice's principle of cooperation.

This paper regards fictional works and fake news as two subcategories of fiction. Fictions are defined as a storytelling where the sender of the story is aware that the story does not correspond with the reality. The difference between fictional works and fake news is the format of the information; while fictional works are sent in a format that signals the work is a work of fiction for aesthetic appreciation, fake news have apparently similar formats as other factual information.

These two types of fiction can be the subject of critical thinking in two ways; As claims themselves, and as arguments that lead to implicit claims. The latter type of understanding is implicit when we call certain films as 'anti-war films'; the claim that war is bad or something is implicit in such films and the events in the film serve as grounds for such a claim somehow. We can use Grice's theory to reveal such an implicit claim behind a fictional work. By comparing fictional works and fake news, we can also analyze more deeply what is wrong with fake news.